

書評：

「日本の海はなぜ豊かなのか」 岩波科学ライブラリ  
ー188

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 和田, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00024710">https://doi.org/10.14945/00024710</a>

## 書 評

「日本の海はなぜ豊かなのか」岩波科学ライブラリー188

北里 洋著

岩波書店, 1,500 円 + 税, ISBN978-4-00-029588-8 c0344

海という身近にありて奥の深いというべきか、底が深い存在は、そこに豊かな世界が広がっているという現実感覚がない。魚屋さんに行けば、ほとんどが海の生き物である。日本人が古くから魚を食べて暮らしていたことは縄文の昔からよく知られており、釣り針も工夫して大きな獲物を捕っていたらしい。

一度でも船で海に出たことのある人ならば、見渡す限りの群青色の大海原は、いつまで見ても変化はなきに等しく、足下数千メートルの海底下には暗闇でありながら豊穡の世界が広がっていると いわれても、なかなか想像しがたい。

今から30年以上前の、1980年以降、有人潜水艇が、フランス、アメリカ、ソ連、日本で造られた。日本は水深2,000 mまでの“しんかい2000”（現在は引退）、1990年ころから“しんかい6500”が潜り始め、世界中のほとんどの海底を自由に動きながら調査を行ない、地球表面の70%も占める暗闇の中の世界を見ることができるようになった。

著者北里さんは、現在（独）海洋開発研究機構の深海研究の最前線におり、静大時代から一昨年なくなられた池谷さんと共著で、静岡地学に有孔虫カタログを連載し目にやっと見える生き物を紹介した。そして、駿河湾と相模湾を長く海洋のフィールドとして研究してきた。この近隣は四つのプレートの境界がひしめく、世界で最も活動的な地質帯を背景に、複雑で多様な地史を背負った地域特有の生き物の世界を発見してきた。北里さんは、世界的な活動として大陸縁辺海域の生態学的ワークショップに参加して議論しているうちに、日本の近海その生物相の豊かさを実感してきて、ご本人の研究する有孔虫や他の小さな生物の間の多様性にも目が広められた経緯が鮮やかにされている。

そして、日本海という典型的な背弧海盆の海は、世界的な氷河期という事変が重なり、その時期は無酸素状態になる。まるで現在の黒海のような無酸素の海のできる過程を見ているような世界が広がっていたという。まさに、日本の周辺において急激な環境変化が起きた事を教えてくれ、それにより日本近海が、様々な環境に適応してきた生物進化の大転回の結果を生み、日本周辺の種の多様性最強の特異点ともいえる世界となったことを示してくれる。

この本で紹介されたように、私たちが未だ知らない生物とも共生していることが認識されるようになり、深海など今まで知られていなかった機能を持つ生物の存在を見るにつけ、生物が多様である事の意味を考えさせられる内容である。実際目に見える生き物以外の生態を知ることが重要であるとは、通常あまり思っても見なかったように思う。もちろん、鳥のインフルエンザなどいろいろな微生物のことも我々の生活につながりがあることがやっとわかってきた。まだその実態はわからない。私たちが自然環境の中で暮らすということは、私たちは、どのような地球の生き物でも、すべてどこかの生

態系の地位を占めた存在であり、ほかの生き物と無関係な存在であることはあり得ないことを教えてくれる。

深海の熱水活動ブラックスモーカーという衝撃的世界を紹介する、ナショナルジオグラフィックの記者の話が紹介されているが、もう一つ自らの米国の深海探査船アルビン号に乗った体験を書いたシンディ・ドーヴァー氏の“深海の庭園”（日本語訳：草思社）の驚きも新鮮でありました。しかし、なぜこのような世界が広がったのかその理由を知りたいと思うとき、その辺りのかゆいところに手が届くような本がこの本であるという事ができそうだ。まさにこの本の特徴は、北里さんの研究活動で、特徴的な深海研究により得られた、生物間の共生関係や食物連鎖などがわかってくると、生き物というのは思いもよらない進化や適応をして環境にあった形や生態系の地位をとるようになる道筋がわかったような気になる。深海研究は、道具立ても特異で進めるにも多いにお金もかかるし、何しろ広い。実は、まだほんの少しだけ垣間見ているという状態であるというのが本当かもしれない。

地球の表面の70%が海であったことは誠に偶然の幸いであったと思わざるを得ない。海の平均的な深さも4~5,000 mを超え、底の広々とした真っ暗闇の世界は、ほとんど零度付近で、数10万年前より温度も圧力も変わらない世界が延々と続いていた。今まで誰一人見たものはいない世界の生いたちと今の姿は、多くの人の興味を誘うであろう。